

《二〇一三年十二月十二日開催 講演会「第1回 世界の中の日本・海外における日本研究

——私は、なぜ「日本研究者」となったのか」要旨》

海外日本研究と私 —— エリア・スタディーズからアイヌ近現代思想史へ

マーク・ウインチェスター

私は、なぜ「日本研究者」となったのか——。私がこの質問に答える先には、一つの疑問がわいてきます。それは、私ははたして「日本研究者」なのか、という疑問です。確かに、私は本学の日本研究所に所属し、C P J S (Certificate Program in Japan Studies) 科目として英語で日本文学 (『The Lives of Japan』) や、現代日本語論、あるいは日本における多言語についての授業 (『The Languages of Japan』) を担当しています。一方、私の専門はアイヌ研究です。論文や翻訳を出版するときに、ときどき編集者から自分のプロフィールを書くように頼まれます。そのときは、「研究の関心」として「アイヌ近現代史、近現代日本思想史、レイシズムと資本制、先住民民族研究、現代思想」と、もっともらしいことを

最近書くようにしています。のちほど私が実際にやっている研究の意義をみなさんに伝えてみたいと思いますが、この自分のプロフィールの書き方から言いますと、私はアイヌの近現代史(要するに、明治維新の前後に行なわれた蝦夷地の内国化から現在までの歴史)に関心があり、その歴史が同時代の日本の思想にとって、いったいどのような意味を持っているのか、あるいはもたせることができるのかということについても関心があり、これは近現代の世界史を大きく左右させてきた資本主義のあり方とレイシズムや差別との関係にも実は関連しており、アイヌの歴史とほかの先住民の歴史と現状との関連性にも関心があり、これらすべてが、実は、私たちが世界史そのものを理解しようとするときに欠かすことのできない重要な課題を示唆してくれるテーマだとまで考えています。プロフィールで書いていることは、私の中ではこのように繋がっています。ただし、言葉やキーワードを並

べるだけで、私の意図を読み取ってくれる人は少ないだろうと思います。

このために、一方で私は自分の専門分野を「アイヌ近現代思想史」とも言うようにしています。これもまた、難しいです。「アイヌ思想史」とは、ほぼ新語だからです。黒人思想史や、ユダヤ思想史、マイノリティにさらされた人々が自分たちの置かれた状況を思想の課題として深く考える伝統はいくつかあります。日本では、沖繩思想史はたまに語られます。沖繩は、戦後日本のあり方の縮図として描かれ、戦後日本の体制の命運を左右する位置にあるものとして捉えられてきましたし、「日本」をより深く考えるためにも注目されてきましたし、その中で沖繩出身者の発してきた言葉も本土で多少注目されましたし、沖繩の中でも沖繩の現状を考えるために沖繩の思想家の系譜を構築するという意味での沖繩思想史の伝統があるからです。アイヌについては、このような伝統は注目されません。これまでアイヌの個人史や、人物伝のようなものを書いてきた人たちはたくさんいました。そして、私が思うには、彼・彼女たちは私が言おうとしている「アイヌ近現代思想史」の系譜をすでに敷いてきてくれたかもしれない。しかし、残念ながら、これまでのアイヌ研究のみならず、アイヌを取り上げてきた多くの研究分野では、自分たちの名を記して文章を発表してきたアイヌは、民族誌的な情報

の供給源、アイヌ全般を代表するような扱い、あるいは、せいぜい時代背景を読み解くための手がかりなどという扱いをなぜか受けざるをえなかった。物事を思考しうる人間としての扱い方ではないのです。まず、この状況を変えることが私の研究の大きな目的です。

しかし、私の研究の意義は、ここだけにあるわけではありません。さきほども触れましたが、私が考えている「アイヌ近現代思想史」は、日本についてだけではなく、実は世界規模の思想課題を提示してくれるのではないか、と思います。とても大きな話です。日本の中でありながら、完全に日本な

るものではないと見出されるアイヌのさまざまな著述家と知識人たちは、世界規模で考えるべき重要な課題を提供してくれている、と私は思っています。アイヌの歴史は、世界規模です。地球規模に重要なのです。私がなぜそう思うかについて、これから少し話したいと思います。ここからは、少し難しいかもしれませんが、私が考えていることを少しだけでも感じてくれれば、うれしいです。

大学の学部生のとき、私はイングランド北部にあるシェフィールド大学の東アジア研究所 (School of East Asian Studies) に所属していました。シェフィールド大学に入学したのは、第一志望のロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (School of Oriental and African Studies) に入ることができたほど成

績が優れなかったからです。そもそも入学試験は高校交換留学中だった東京で受けましたし、そのときはまったく違う日本の高校の勉強をしていました。しかし、シェフィールド大学に入って人生は大きく方向づけられました。私がシェフィールド大学にいたころには、アイヌも含めて、日本のマイノリティに関心を持つ先生たちが何人か集まっていました。入学した一九九八年の前の年に彼らは *Japan's minorities: the illusion of homogeneity* という本も出版していました。一年生のときは、私は日本語もある程度できて日本語の授業をとらなくてもよかったのですが、美学の哲学から韓国現代文学までいろいろな授業をとっていました。二年生になったら、やっと日本関係の授業をとることが許されました。

そこで、日本におけるレイシズムや差別をテーマとした授業にも出席しました。その授業で、レイシズムに関する社会学論をいろいろ勉強したのですが、その中で、私が授業の発表のために勉強をしていたとき、一冊の本に出会いました。当時は、ロンドン大学の研究機関であるゴールドスミス・カレッジで社会学の講師をしていたポール・ギルロイという人が書いた *The black Atlantic: modernity and double consciousness* という本です。一九九三年に出版された本です。日本語訳は、二〇〇六年に出ました^③（残念ですが、KUISSの図書館には入っていないのです）。私は大学の図書館から一回借りて読んだ

ら、すぐに中古で四・九九ポンド（当時一〇〇〇円ぐらい）で買いました。この本は、いろいろな意味で画期的な本でした。日本でも翻訳が出たときに大きな反響を呼びました。この本において著者のギルロイは、近代において黒人たちが（ときには強制的に）行き交い続けてきた時空間としての大西洋をもって、従来の私たちが持っている歴史観を揺るがし、黒人の近代経験を世界文明の真っ直中に据え変えようとした。考えてみれば、当たり前のことですが、アフリカ西岸と西インド諸島とを結ぶ中間航路を利用した奴隷制と三角貿易以降、否応なく黒人たちの近代経験は世界をつなぎました。近現代文明を可能にした奴隷制によって、黒人たちの経験は優れて近代的なものであり、思想的にも私たちにさまざまなことを教えてくれるはずなのです。にもかかわらず、黒人音楽の流通や、黒人思想家たちの西洋哲学との対峙の軌跡などは、いまでも、たとえば「西洋思想史」や「アメリカ思想史」などといった大学の授業では真摯に取り上げることがありません。一方、ギルロイがアメリカのノーベル文学賞受賞者のトニ・モリスンの小説『ピラヴド』からの一節を引用しているように、それが「伝えられるような話ではなかった」がために、奴隷制の痛ましすぎる記憶と奴隷制以降の黒人たちの抵抗と自立の歴史はしばしば一国単位で語られてしまい、その世界史的な意味とそこから生まれた思想の営みは薄れてし

まいりました。

ギルロイは、その意義をもう一度すくい上げようとししました。彼は、西洋の中にながら西洋そのものではない、という黒人たちの「二重意識」に注目しました。排除されてきた人々が、実はその排除においてこそ、排除されうる者として近代に包摂されていました。そして、多くの黒人の音楽家、文化人、知識人などは、白人が持った知的関心から同時代の根本的な問題を立ち聞きして、引き継いだのです。彼・彼女らは、取り返しがつかない形で近現代社会の構成員になっただけではなく、ときに同じ近現代社会の擁護者として、そしてときに、そのもっとも鋭い批判者として世界の知的遺産に貢献してきたのです。自分たち自身が近現代世界に組み込まれているのだという感覚についてどう発言してきたか、そこから得られる知見と、自分たちの社会的・政治的生存にとつてありうる最良の形とは何かということを探究してきた彼・彼女らの思想は、決して軽視すべきではありません。多くの場合、それは排除や差別をされていない者たちが彼・彼女らを排除することによって自分たち自身の可能性を制限して、自分たち自身を傷つけているありよう、自分たち自身をも非人間化してしまっている事実への告発をも含めているからです。こうした黒人たちの「二重意識」は、たとえば、『ブラック・アトランティック』に紹介されている、次の印象的なエ

ピソードに現れていると思います。少し長いかもしれませんが、読み上げてみます。トリニダードの作家のC・L・R・ジェームズ（一九〇一〜一九八九）が、アメリカの小説家のリチャード・ライト（一九〇八〜一九六〇）の当時のフランスの自宅を訪問したときの話です。

ライト一家の所で週末を過ごそうとフランスの一方へ赴いたジェームズは、彼らの家へと案内され、書棚にあった膨大な数のキルケゴールの本を見せられた。ライトはこう言いながら棚を指さした。「ほら、ネロ（ジェームズのこと）、あの辺の本だよ……こういった本に彼が書いていることは全部、ぼくは本を手に入れる前からわかっていたことなんだ」。キルケゴールの挙げた諸論点についてライトが予め直感的に得ていたかのような知識は、ジェームズの言おうとするところによれば、直感的なものではまったくない。それは両大戦間期に合衆国で育った黒人としての彼の歴史的諸経験が生んだ、ごく基本的な産物であった。「ディック（リチャードの愛称）が語っていたのはこういうことだ。つまり、彼は合衆国の黒人であり、そのことは彼に、今日における普遍の見解や近代的パーソナリティの態度についての洞察をもたらしにくれたのだ」。ジェームズは次のように彼らしい仕方

話を結ぶ。「ディックの生にあったものが何なのか。一九三〇年代に合衆国で黒人であったという経験の内の何が、キルケゴールが書いたこと全部を、それを読む前から彼に理解させていたのか……ということが考究されなくてはならない」。こうした所見においてジェームズが提起しているのは、まさに『アウトサイダー』がフィクションの形式によって要請し着手したことで、つまり近代世界の内部にいる黒人の位置と経験について分析することであった。よく成熟したライトの見地からすれば、ニグロはもはやたんなるアメリカの隠喩ではなく、西洋全体の心理的、文化的、政治的諸システムにおける中心的なシンボルである。ニグロのイメージとそれによって根拠づけられる「人種」概念は、国境を越えて拡がってアメリカをヨーロッパやその諸帝国に結びつける西洋の感受性の、生きた構成要素をなす。

『ブラック・アトランティック』三二一～三二二頁)

合衆国における黒人としての経験は、最初の実存主義哲学者とも言われるキルケゴールが指摘した、近代人の持つ特殊な不安と絶望、または圧倒的な個人性をライトによく教えてくれました。

当然ながら、日本もこうした西洋文明との複雑な関係性を

持っています。言ってみれば、「アイヌ」や「琉球人」をおして自らの先進性を確認してきた「日本人」というアイデンティティは、同時に西洋からの眼差しの中でたえず客体化されました。さらに二重した関係性があるわけです。私の研究でいう「アイヌ近現代思想史」では、こうしたさらに二重した関係性の中で、ギルロイが指摘した黒人思想史の可能性は、実はアイヌの著述家の発言の中にも発見できます。たとえば、北海道平取町出身の作家・鳩沢左美夫（一九三五～一九七二）は、戦後日本の高度成長期の真っ最中に、対談の中で次のように言っています。

アメリカの黒人問題を論じようとしたら、アメリカの歴史、現在の国際情勢、また、政治体制、ね、ここらあたりまで探りを入れなければ無責任批判になっちゃうと思ふんだ。でも僕は僕なりの考えで一つだけ言えることは、白人支配の現在の姿で、文明が高度の発展を遂げれば遂げるほど、いっそうその矛盾は深まるだろう、ということ。つまり、コロンブスの遠征に始まるアメリカ史からすでに“人間”という黒人たちの記載が落ちているように思うからだ。いつの時代も、世界文明のバイオニアは白人たちだってね——。黒人は、それをささえる牛馬の役目を果たしちゃいいんだ。ね、だから、僕は、人間！と

いうあたりからこの黒人問題を見つめたいんだ。すなわち、そういう視点がね、アイヌ問題にも当て嵌まるんじゃないか、ということ——。今、あなたがああなるのが当然だといったが、最近の国際情勢一つをとっても僕もそんな気がする。一アメリカの黒人問題じゃなく世界の“人間に対する問題”だってね——。だから、そういうものに呼応した形の活動は日本にも結構あるわけだ。でもね、日本自身の国内の人種問題となると、なんか少し悠然とかまえずぎているように思うんだ。そういう動きはあるにはあるが、とくにアイヌ問題となるとね。

〔若きアイヌの魂〕一四頁⁴

鳩沢がここで言っている「世界の“人間に対する問題”」は、まさに私がさきほどから強調している、アイヌ研究において発見できる世界規模の思想課題であり、浮き彫りにして考えるべき課題です。近現代のアイヌの著述にこの「人間」という言葉はとても重要です。よく出てきます。これは「アイヌ」という民族名がアイヌ語で「人間」という意味であることにも関係します。たとえば、私が博士論文において主に論じた佐々木昌雄（一九四三〜）というアイヌの詩人・思想家は、次のように言っています。

「アイヌ」ということばは、本来（人間）という意味なんです。それより古くは、普通の人間というよりは、一人前の人間、あるいは大人である人間、すぐれた人間、という意味で使われていたんです。それがいま、全く違った意味で使われている。それがことば本来の姿に戻った時がとりもなおさず、「アイヌ」全体の回復の時であるし、また「シャモ」という蔑称も回復されると思っています。

〔幻視する（アイヌ）〕二四〇頁⁵

差別され排除されて、民族名まで差別用語のように使われていたこの言葉が書かれた当時の一九七〇年代に、佐々木も鳩沢の「世界の“人間に対する問題”」を発見した。私がアイヌ研究に惹かれたのは、このようなことです。近代的権力の連接の決定的な地点において生産されてきたマイノリティ同士の間に存在する、こうした、ある意識の絡み合いです。差別や排除によって近代世界に組み込まれてきた人たちがその近代世界のあり方を考えようとしたときに発見される、同じような「世界の“人間に対する問題”」。ギルロイが試みたように、こうしたアイヌの近現代における経験とそれをめぐる知見が、たとえば日本思想史、あるいは世界の思想遺産として考えられるようになったら、私たちの世界認識はどう変

わっていくのでしようか。私は、このようなことにもすごく関心があります。

では、私の最初の疑問に戻ります。私ははたして「日本研究者」なのでしょうか。ある種の「日本研究者」であることは確かです。研究のフィールドも基本的に日本です。しかし、これまで主流だった海外、特に英語圏の日本研究とは少し違う気がします。よく指摘されてきましたが、アメリカやイギリスにおける地域研究（エリア・スタディーズ）一般とその資金源とのあいだの関係の問題が一つありました。つまり、研究の対象国政府や関係組織の基金に予算的に依存することによって、研究の方向性やあり方そのものに偏向が生じる危険性があります。日本研究も含めた地域研究の主導者たちが資金確保に腐心するばかりで、自らの知の生産の構造や学問的知識への関心については決して問題にしないという状況もあります。なお、特に日本研究には、対象としての「日本」についての同じような知を生産することのみが関心事となってしまうこともあります。第二次世界大戦後、アメリカの多数の大学においてつくられたエリア・スタディーズが潜在的にもった軍事的志向——たとえば有名なルース・ベネディクトの『菊と力』が戦時情報局の支援によって成立しているように——、アジアにおけるアメリカの植民地主義的なヘゲモニーを支える情報収集プログラムの性格のようなものも多かつ

たのです。このような態度は、実は、いまでもよく見かけます。日本はあくまでもフィールドで、日本は「日本」についての知識の供給源に過ぎないと見る研究者がたくさんいます。まるで、アイヌ研究者がアイヌの著述家を単なる情報の供給源としか見ていなかったのと同じような状況です。一方で、そうでない日本研究者、「世界の中の日本」というより「日本の中の世界」を見て取ろうとする日本研究者の日本研究が、日本の日本研究（という言い方が不思議ですが）や文化研究と思想研究に大きなインパクトを与えるようになってきています。日本研究は、ますます海外研究者との共同研究として遂行されるようになってきています。その中で、海外の日本研究の強みと日本の日本研究の強みとを繋ぎうる、次世代の日本およびアジアを対象とする研究の担い手も増えてきている気がします。

シェフィールド大学でエリア・スタディーズを学んで、一橋大学で社会学と思想史に移って、さらに今現在、日本研究を神田外語大学で自分の中で再評価しはじめながら、アイヌ近現代思想史の可能性を模索しようとしている自分も、その次世代として何らかの貢献ができれば、と考えています。

註

- (1) Michael Weiner ed., *Japan's minorities: the illusion of homogeneity*, London & New York: Routledge, 1997.
- (2) Paul Gilroy, *The black Atlantic: modernity and double consciousness*, London: Verso, 1993.
- (3) ポール・ギルロイ著、上野俊哉・鈴木慎一郎・毛利嘉孝訳『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』東京：月曜社、二〇〇六年
- (4) 鳩沢左美夫『若きアイヌの魂——鳩沢左美夫遺稿集』東京：新人物往来社、一九七二年
- (5) 佐々木昌雄『幻視する〈アイヌ〉』東京：草風館、二〇〇八年